三、健康者と病者

健康とは何んなものか？「健康とは病氣のない有樣だ！」と大抵の人は說明する。それは恰も「利巧でなければ馬鹿だ」とか、「貧乏でなければ金持だ」といふのと同じく、たとひ利巧でない人でも悉く馬鹿とは限らないし、貧乏でなくとも金持でない人もあるやうなわけで、人間は健康でも病氣でもない狀態がある。しかもその數は、健康な人および病者の數に比べると非常に多いので、つまり世の中の大抵の人は、病氣でも健康でもない狀態にあるものである。自分はこんなに弱さうに見えても、病氣に罹つたことはないといふやうなのがこの部に屬するのであつて即ち健康と病氣とは兩極端でその中間に多數のどちらでもない人があるのである。

健康といふのは精神的にも極めて愉快な狀態でなければならぬ。しかも其の愉快さが一日のうちで朝起きるから夜寢るまで續かねばならぬので、朝の內は不愉快だとか、夜分になると不愉快だとかいふのは、決して健康な狀態ではない。しかし心の狀態も愉快と不愉快の二つの中間に、愉快でもない、不快でもない心持のときがあるその時には、その人は病人でもなく、且つ健康でもない中間の人である。

この何でもない人と病者との區別は、これをはつきりすることはなか〳〵困難で、それは病氣の存在と否とによつてきまるものであるが、實際にはこの病氣の存在は、醫者でなければわからない。

本校に於ては三四名の病床に臥してゐる者もあるし、登校はしてゐるが腺病質のもの（身體發育の薄弱なもの）肋膜炎癒後のもの（氣管支炎）心臟の弱いもの、脚氣のもの、喘息のもの等合せて二十名を越ゆる狀態である。このやうな人は正課は勿論課外運動にも參加出來ず取殘された樣な形になつてゐるが、このやうな人々は各自事情に適した方法を以つて身體の改全を計られた方がよいと思ふ。